

2021年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2022/9/15

団体名	NPO法人フリースクール地球子屋	活動タイトル	不登校児の早期発見と総合的な支援による地域連携試行事業		
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）			■ 活動風景		
● 地域の望ましい社会状況(ビジョン)	子どもを取り巻く状況は悪化しており、自己肯定感・自信がない子どもが追い詰められ孤立化し不登校となっている。小中学校は不登校を解決できず卒業させ学校種や年齢による制度の切れ目で苦しむ子ども・若者が増加している。その現状から子どもの人権・福祉が保障（生存・保護・育成・参加）され、子どもが安全・安心して育つことができる家庭環境となり、多様な教育環境からその子どもの力が発揮できるように自分の合ったものを選択できる社会を目指している。		<div data-bbox="1630 236 2096 528" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="1496 437 1608 459">活動の風景①</p> <p data-bbox="1630 544 2085 592">参加体験型による課題解決学習としてチームで会社経営を体験。自らのキャリア形成を考えるきっかけとなった。</p>		
● 団体の社会的役割(ミッション)	子どもの人権・福祉の保障という価値観を保護者・家族に共有し不登校への理解を促し、不登校の子どもに対して多様な教育環境の実践に基づき切れ目のない支援を行い、一人ひとりの子どもの社会的自立を促す。そのために、1) 子育て支援事業（親の居場所としての親の会、不登校学習会、親子カウンセリング、訪問支援など）、2) 子どもの健康回復事業、3) 多様な教育実践事業、4) キャリア形成事業、5) 不登校やひきこもり支援機関との連携・協力・調査研究の5つの事業に取り組む。				
● 団体の活動基盤	不登校の子どもへの対応を身につけるプログラムを実践中だが家族との相談対応できる人材を育成する仕組み、プログラムを整備していく必要がある。不登校支援で必要な資源は学校文化とは対極的な多様な学習教材と年齢学年を超えた小集団である。教材の中でも製作プロジェクトは達成感と自信につながり実現のための道具やツールの充実が鍵となる。活動資金は会費、地域連携プロジェクト、多様な教育機会確保法を前提とした公的資金によってバランスよく成り立つ状態を理想としている。				
■ 活動報告			■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)		
<p>不登校は、保護者が子どもを抱え込む中で家族関係が悪化し子どもが孤立化することで長期化する。よって不登校支援は、保護者に対して早期対応の重要性を理解してもらい、子どもの状態悪化を防ぎつつよりよい状態へと進めていく事である。</p> <p>不登校「初期」では、初期アセスメントシートに加え、健康状態チェックリスト、疲労状態診断シート、発達障がい簡易チェックシート、多重能力グラフなど相談の見える化を実現し子どもの対応に役立てることに成功した。中長期化する子どもには、10段階モデル評価シートに加え今のような支援が必要であるかわかる診断ツールを開発し相談に組み込むことでより明確な目標を共有することができた。フリースクールでは多様な教育方法の実践やメンターとのWS型相談が定着し子どもの元気回復に寄与できた。また、当団体だけでなく教育委員会、SSW、SC、学校との連携を強め、ケース会議などより緊密な連携ができるようになり包括的な支援体制が強化され不登校支援の理想的なモデルに近づくことができた。</p>			<p>不登校支援は、保護者の相談支援から始まるため相談への仕組みづくりとして教育委員会、学校、病院に訪問など行い連携が強化された。また主催する「ともに育つ親の会」「不登校学習会」へ140人が参加し44人（31.4%）が相談につながった。不登校を初期、中期、長期に分けた総合的支援に取り組み、ほとんどの子どもに改善がみられた。初期相談では保護者に子どもの状態をアセスメントシートで評価した。相談継続（平均2.6回）し2度目以降は健康状態、ストレス反応、多重知能グラフなど相談の見える化をススメ、初期対応相談を構造化することに成功し、目標とする月平均10人の相談を大きく上回る166人の相談があった。半構造化プログラムとしてWS型相談を開発し年間96回実施できた。メンターや子ども同士の関係が構築でき、保護者相談と両輪で効果が確認された。中長期の子どもは10段階モデルに基づく個別支援目標を作成し、行動回数を記録したところほぼ全ての子に行動変容が確認されスコア改善できた。コロナ禍の影響で状態悪化した子どももまれにいた。メンター9人、スタッフ1人を対象に月2回育成講座を開催し、不登校理解、コミュニケーションスキル、リラクゼーション法をトレーニングし、WS型相談に参加し子どもとの関係構築に役立った。</p>		
■ 事業を通じて得られたノウハウ			■ 望ましい社会状況を達成するための課題		
<p>不登校の子ども支援は、不登校状態の期間によって初期・中期・長期と分け子ども自身とご家族と両面から関係性の改善をする必要がある。不登校は一人ひとり原因も背景も異なり対応方法の標準化は困難であったが、助成1年目に作成したアセスメントシートを進化させ、現在の子どもの状態を見える化する事で対応方法も共通理解することができた。同時に子どもの状態が家族や支援機関に言語化され共有が可能になった。信頼されたのは子どもをアセスメントするノウハウが確立した事が大きい。</p> <p>助成2年目は、初期アセスメントとWS型相談の両面から子どもの状態を把握することができた。6か月以上1年未満中期不登校生は特に初期相談のアセスメントシートからさらに健康状態やストレス反応など深く理解することWS型相談による子どもの実態を重ねていくことでより正確な状態把握ができた。10段階モデルのスコア化は、具体的目標となり一人ひとりの対応方針につなげることができた。特に健康状態とストレス反応の関係、自己理解と学習意欲と今後の目標についてのスコアの改善が双方に影響していることがわかった。</p>			<p>不登校の子どもは、学校へ行けない身体に変化しているにも関わらず、頭では強固に学校へ行かなくてはならないと思込んでいるために矛盾が生じた状態である。努力しているが学校へ行けなくなるが本人の責任はほとんどないが、行けない事実が辛い気持ちや孤独感となる。学校は、自身の成長に必要な選択肢、手段の1つであり、現在は学びを自ら選択してよいことを伝えていかなければならない。しかし学校・保護者には再登校の価値観がまだ根強い。不登校となったことで「多様な教育を選択できる」という概念を啓発していくことが課題である。</p> <p>不登校は、社会の側の問題なのであって子ども自身ではない。さらに言えば子どもへの教育手法は、集中的に系統性をもって取り組む時期と総合的、包括的な視点で地域課題に取り組む問題解決力が高める時間と自分のスキルや好きな分野を深める時間を融合した21世紀型の教育を学校外のフリースクールが先行して実現することで、子どもの選択肢としての実現性を上げる必要がある。</p>		
			■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）		
			この1年間の活動を通じて	不登校に関わる支援機関との連携が強化され、初期、中期、長期不登校の子どもへ総合的な支援の実施	を達成しました。
			■ 受益者の具体的な変化（自由記入）		
			<p>当法人の取組は、埼玉、徳島、大阪、福岡などの支援機関にも問合せいただき広がる兆しが見えています。不登校でも子どもが笑顔を取り戻し、様々なことへ意欲を取り戻していくことができました。子ども一人ひとりと向き合う余裕がない世の中でフリースクールという場所が子どもたちにとって最後の安心できる場になっていると感じています。</p>		